

出土陶磁器類と浅間大社の信仰

渡井正二

出土陶磁器類のグラフ（第3表）を見ると、16Cまでに比べ17C以降が急に多くなっているが、年代の古い物より新しい物が多く残っているということは当たり前のことなのかもしれない。また、宝永4年(1707)の富士山の噴火にともなう地震や安政元年(1848)の大地震などによって浅間大社が被害を受けているので、その際には当然什器類の被害も多かったであろう。そうしたことを考えると、17Cから19C前半にかけての陶磁器類の出土が多いのは当然であるといえる。

また、陶磁器類の産地については、17Cから18C前半にかけて肥前物が多く18C後半から瀬戸美濃物が多くなっているのは、その産地の事情によるとも考えられる。瀬戸美濃焼は文化年間(1804～1816)加藤民吉が九州に渡り磁器の製法を習得して今日の発展をみるに至ったが、江戸中期には肥前産の磁器が出回り瀬戸美濃焼が衰微したことに関係しているのだといえる。なお17Cから18C前半にかけて志戸呂焼が少しみられるが、志戸呂焼は距離的に近く有利であったと思うが、もともと生産量の少ない産地なので数が少なかったであろう。

しかし、そうした外的一般的理由ではなく、こうした多くの什器を必要とした浅間大社の信仰についても考えてみる必要があるだろう。まずその一つが、浅間大社を訪れる富士登山者である。

富士登山が、鎌倉時代の修験者によって始まり、室町時代には富士行といわれる富士参詣（登山）の道者が浅間大社を訪れるようになった。室町時代狩野元信によって描かれた「絹本著色富士曼荼羅図」（富士山本宮浅間大社蔵 重文）を見ると、東海道を西からやってきた道者（登山者）が、浅間大社の湧玉池で水垢離を取って村山を経て富士山をめざしている姿が描かれている。江戸時代になると富士参詣者はその数を増し、

富士宮市史（右の表）によると、18C中ころには村山で一番勢力のあった大鏡坊の道者到着人数が約100人であり、全体では200人くらいだったと推定される。しかも、富士山御縁年といわれる庚申の年、元文5(1740)年には1440人が、間の申年といわれた享保13(1728)年には311人の道者が到着している。

特に出土陶磁器類の数を増している18C後半から19Cにかけてというのは、寛政（1789～1800）ころより関東方面で盛んになった富士講による登山者数の増大した時期である。関西方面からの登山者の多かった富士宮口でも、大鏡坊文書によると寛政12庚申(1800)年には2000人の道者があり、文化年間の道者到着人数も急激にふえている。（右の表参照）

大鏡坊道者到着人数（富士宮市史）

年 号	西 暦	道者数
宝永元甲申年	1704	600
享保13戊申年	1728	311
元文5庚申年	1740	1440
寛保元辛酉年	1741	100
寛延3庚午年	1750	100
寛延4辛未年	1751	100
寛政12庚申年	1800	2000
文化3丙寅年	1806	430
文化5戊辰年	1808	360
文化7庚午年	1810	200
文化9壬申年	1812	679
文化11甲戌年	1814	480

この時期、寛政から文化・文政のころ浅間大社でも参詣者の世話をした社家が、春長坊・清長坊・御炊坊・鎖是内記（内記坊）・同式部の5坊あった（「富士の研究Ⅰ富士の歴史」井野邊茂雄）といわれるほどで、浅間大社はかなりの登山者を迎えていたのである。この登山者の浅間大社参詣と出土陶磁器類の数と関わっているといえないだろうか。

次に、富士修験や富士講の富士参詣（登山）の面からだけではなく、浅間大社本来の信仰の面からも考えてみなくてはならない。

荒らぶる火の山を鎮めるための神として祭られた浅間大社が、水源に下りてきて水源を支配するようになり、火の神を鎮めるための神としてばかりではなく、水徳を以て農神に変化し今日の浅間大社の信仰を完成してきた。しかし、南北朝時代の天皇方や足利方の浅間大社への所領の寄進、戦国時代の今川氏や武田氏による所領の寄進・社殿の造営は単に信仰とばかりは考えられず、むしろ浅間大社の世俗的な権力を利用しようとしたものではなかったかと思われる。当時、浅間大社はこの地方を代表する権力を持ち、大宮司を中心とする武士団として大宮城を形成し、そこが活動の中心となっていた。

しかし、江戸時代の徳川家康による社殿の造営は、戦国時代とは逆に世俗的な権力を解体し宗教的な面に専念させるためのものであったといえる。そのため、江戸時代になると宗教的な活動が盛んに行われたものと思われる。「富士の研究Ⅱ浅間神社の歴史」（宮地直一・広野三郎）を見ると「天正の神事帳」に66度「慶安の神事帳」に98度の神事が記録されている。その内、1月から4月の主な神事を上げてみると次のようである。

1月 元旦神事（1日）・田遊び神事（4日）・よそう合之飯（5日）
七草神事（7日）・仁王会（8日）・天上小豆粥（15日）

2月 月次神事（毎月1日）・彼岸講（彼岸）

3月 小猿会神事（3日）・柴振舞（未ノ日）

4月 山宮御神幸（初未ノ日）・初申神事（大祭礼）（初申ノ日）・夏振舞（15日）

これらの神事の内容を見ていくと、所々に食物や酒を供した様子が述べられている。

仁王会 札を掛くる木は、山宮の百姓より出す。・・・百姓へは大宮司より酒一樽を出して餐應す・・・法事以前に出仕の衆へは、焼餅に納豆を添へ茶を餐應し法事の後は、芋・豆腐・海苔の吸い物を餐し酒を出す。

彼岸講 牛蒡・肴・酒等を出して一同に餐す

四月初申神事（大祭礼） 惣社家中へは一汁三菜及び酒を餐す

神饌は御供六膳・御粉餅六膳・御菜六膳・瓶子一・四天飯・廿三社飯の六種

このように、神事では、参加者に食物や酒が振舞われているし、神饌として多くの食器が使われているなど、陶磁器類の使用も増えていったものと思われる。特に、18C後半以降瀬戸美濃焼の日常雑器類が多く使われていることなどもうなずけるところである。

さらに神事の内容の中に、次のような記事が載せられている。

山宮御神幸（4・11月初未ノ日） 神饌は廿四の土器御酒

四月初申神事（大祭礼） 高机を据え、廿四御酒・土器三個・瓶子二個を置く。

土器酒の儀あり・・・奉幣使は・・・土器二個を取りて酒を受け・・・

近世土師質土器は、かわらけ（土器）と呼ばれ祭祀用器として用いられていたもので、18C後半以後に土師質土器が見られるのは、祭祀に使われたかわらけ（土器）の類ではないかと思われる。

調査範囲が浅間大社の限られた地点であり、出土陶磁器類がどういう使用目的の物であったか断定はできないが、富士登山者や浅間大社の神事と関わるものとしてとらえてみた。17Cから19C前半にかけての陶磁器類の出土が多いのは、江戸時代中期以後の富士登山者の増加や浅間大社の神事の盛行と関わるものだといえると思う。